ECOMUSE

資料館だより

NO.67
2019年
2月号

過去と未来がひびきあう
―ようこそ、エコミューズへ。
www.aozora.or.jp/shiryou/

あおぞら財団付属
西淀川・公害と環境資料館
エコミューズ

全国歴史資料保存機関連絡協議会（全史料協）沖縄大会（2018/11/9）大会テーマ研究会にてエコミューズの報告をしました

文化

全史料協全国大会（那覇）

「記録資料 命の証し」

価値再考や活用議論

琉球新報にも報道されました
（2018/11/16）

全史料協は、文書記録を中心とする記録史料を保存し、利用に供している機関（文書館、公文書館、図書館、歴史資料館、自治体史編さん室、大学資料室等）と史料を保存し利用に供する仕事に携わる方々の組織で、エコミューズは全史料協の方々に資料館の運営についてアドバイスをいただきながら活動を続けてきました。

その全史料協の全国大会にて「アーカイブズ再考―その価値と活用―」がテーマとなり、沖縄県公文書館と共に資料と人権について考える一つの例として、エコミューズが取り上げられることとなりました。マイノリティの声や資料が残りにくいこと、運動をすることで社会を変えることができる希望としてエコミューズの資料があることを報告しました。

沖縄には基地問題や沖縄戦のことがあることから、エコミューズの活動に共感して下さる人が多く、会場で多くの方に声をかけていただきました。この様に共感の輪が広がることはとてもうれしく、活動を続ける力になったように思いました。（林美帆）

『公害に抗する教育』に取り組まれた藤岡・福島両先生から資料をご寄贈いただきました ～第6回公害資料館連携フォーラムin東京「教育2」分科会～

昨年12月14～16日、「第6回公害資料館連携フォーラムin東京」を法政大学多摩キャンパスにて開催しました。全体テーマをSDGsとし、基調講演や各分科会が開催されましたが、ここでは公害問題が激発した時代に、公害に抗する教育運動を中心になって展開されたお二人をお招きした「教育2」分科会の報告をします。

元高校教師で地理教育研究者でもある福島達夫さんは、足尾銅山周辺の山が100年経っても草木の生えていない状況を目の当たりにし「銅山のことを教えながら、こういう状態を教えないとはどういうことか」と公害問題に目を向けられました。沼津・三島コンビナート反対運動や三重県南島町住民の手探りの原発学習と反対運動などとの交流をお話いただいた上で、カーソンの『沈黙の春』の巻頭言を引き「人間は、予見する力、機先を制する力を取り戻さなければならない」と、公害教育の意義を語られました。

教育学者の藤岡貞彦さんは、「偉大な公害教育にとりくんだ教師たち」として、西岡明夫・田中裕一・吉田三男・斎藤作治・大内秀夫を紹介されました。そして「この5人の教師を貫くものは『住民の護民官』だということ」とし、地域の住民を守るために、教師がその学習を助けたこと、国家が決めた指導要領に縛られず、問題に切り込む教育課程を自主編成されたことを、大きな功績として紹介されました。また参加者に「公害・環境教育研究文献リスト」を配布してくださり、藤岡先生ご所蔵の貴重な資料の中から6冊をエコミューズにご寄贈くださいました。

福島先生からも1970年刊の『週刊読売』臨時増刊の公害特集号をエコミューズにご寄贈いただきました。表紙は赤赤とした煙の上がる尼崎工場群で「この煙の下であおぞら財団ができたのです。この絶望的現実が出発点です」と、公害資料館ネットワークが「公害・環境の運動の砦」になり得ると期待を語ってくださいました。

貴重な資料を受け継ぎ、身の引き締まる思いですが、「公害に抗する教育」の精神を引き継ぎ、未来に向けてSDGs達成に寄与する公害教育に取り組んでいきたいです。（栗本知子）